酸素ボンベ開始の頃にさかのぼる！

余命 DE マンボ ⑧

たくさん動けたあの頃号
2018
12. 30

タイトルの由来／これは死の宣告を受けてからはじめた「旅のレポート」である。いろいろな場所にキャラクターを連れて旅をし、その模様を書いている。気が向いた時だけ書くいい加減な連載だ。タイトルはできるだけフザけたものにしたいと思った。「余命を生きる！」みたいな真面目で重苦しいのは嫌だった。「余命 DE ルンバ」と「サンバ」と「マンボ」を思いついたが、「ルンバ」は掃除機なので止めた。「サンバ」は、「♪～行かないでお嫁サンバ」でかなりアホっぽい。しかし、やっぱり殿キンの「♪～抱かれてマンボ～チャチャチャ」の脳天気さには適わないと、「余命 DE マンボ」に決めた。とても気に入っている。

元気だった８５０日前！

●2016年8月9月。私は今よりずっと元気だった。動ける内にと、旅行にも行った。
●一ヶ月の間に7泊8日で京都に2回。続いて3泊4日で伊勢にも行った。今しか出来ないムリを強いたのだ。
●人生は過ぎ行く―。850日が経ち、動けなくなり、介護度は4。今はやっと車椅子で動いている。そして元気だった頃を懐かしく思いながらこのレポートをまとめている。
●時計の針を2016年8月21日に戻した。

組合のお祭り「ばんばん祭」だ。みんなで手塩にかけて10年。川口三大祭りに育ち、今や8千人の動員がある。今日はドラえもんを連れて最後の総合司会をしに行く。

大好きな富沢さんとの、手打ち蕎麦とドラえもん。

バルーンのトモちゃんと奥様。なくてはならないこの祭りの芸達者だ。

左から、奥ノ木川口市長、石川組合理事長、そして私。人生最後の司会。

たくさん動けた６週間の記録

2016年7月27日～9月6日の６週間。

●7月17日から酸素ボンベを付けた。
●7月27日から8月3日まで第1回京都ステイ。
●8月21日がばんばん祭の司会。
●8月25日から9月1日まで第2回京都ステイ。
●9月2日～3日までは伊勢志摩に団体旅行。
●9月4日～6日までは名古屋に個人旅行。
●人生の最期に最も精力的に動いた期間だ。
●京都がとても楽しかったので「住みたい！と思い、いつもの占い師にみてもらう。
「京都引越しは大吉」と言われ、終の棲家を京都に決めた。第2の素晴らしい人生のはじまりだった。
その人生の最後の節目になった日々がこの頃。
私の人生の宝物の日々だ。

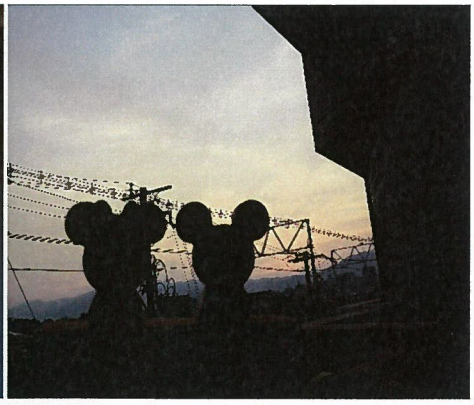
7月27日～と8月25日～の2回、京都へ

●ウィークリーマンションを借りて京都に暮らした。思った以上に楽しかった。
材料を買って自由に料理を作り、ごちそうもした。アチコチ出かけた。至福の日々だった。そして私は京都に恋に落ちたのだった。

●私のアジトのウィークリーマンション。両袖の引き出しも、段ボールで作った。
色々な道具もばんばん家から送ってもらった。

●左の写真のパソコンの上にある焦げた板は、スーパーに段ボールを拾いに行って見つけた。魚の箱のフタか何かだろう。
京都暮らしの始めから壁に飾り、今でも家に飾ってある。私の旅立ちのモニュメントだ。

招き猫に宝石を付けてデコ猫を作った。久し振りに絵も描いた。料理もたくさん作った。至福の日々だった。



「ミッキーマウス」と一緒に京都に行き、京都を歩く。どこで撮るかを考え、いい写真が撮れると楽しい。

あまり有名ではないが、「ダヤン」と一緒に京都を歩く。この意地悪な顔つきが好きだ。

錦市場で食材を買い込み自分の店から器も取り寄せ、毎日宴会をした。どうせ死ぬのなら、京都に一度住みたい思いが強くなっていった。

我が師匠、佐藤禎三先生の家は、藤井寺と近い。

器は店から送り、好きな器で料理を作った。

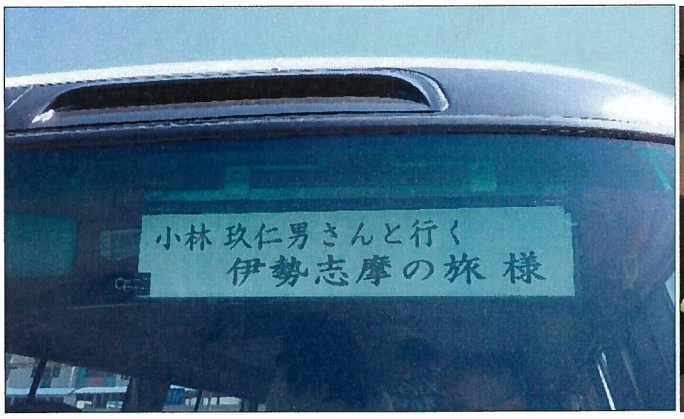
貴船の川床料理は、川面 10 センチに床を張り市中より 10 度は涼しい。滝さん、アカザさんと。

2016. 9. 2 ～ 9. 3 伊勢志摩

京都から戻り、翌日には「伊勢志摩」に。強行軍だが、大丈夫だった。
酸素ボンベも持ってきてるが、なくても動けた。車椅子の今、元気な頃を懐かしく思う。

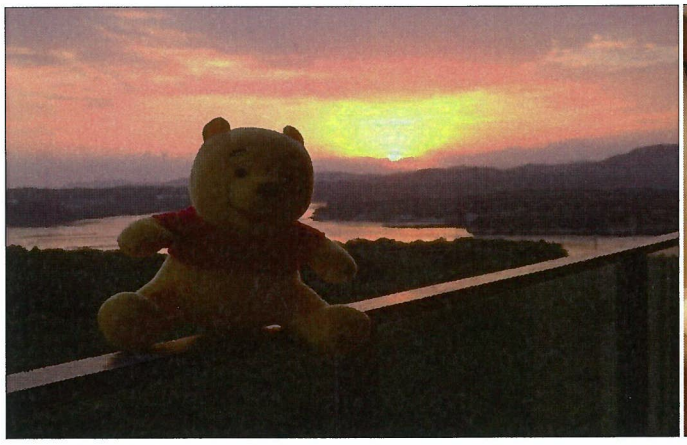
このツアー、友人の仲川ご夫妻と妹さん、中村ご夫妻、平田ご夫妻、熊木ご夫妻と私の10人で行く大名旅行で、私の行きたいところに連れて行ってくれる。今回は「伊勢志摩サミット」の志摩観光ホテルと伊勢神宮の旅だ。

京都から戻ってすぐ、伊勢志摩に！



こうやってバスにもツアー名が。気持ちＥ！

同伴キャラは「プーさん」。過激に 24 匹を宅急便で送った。



部屋のバルコニーからの夕焼けとプー。

部屋はゆったりと100平方メートルもある。

いちばんの目的は、サミットと同じ料理を食べること。コース料理は5万円！もする。お酒を入れて10人だと軽く60万円超えだ。そしてサミットと同じ場所で記念写真も撮った。私の大事な思い出のアルバムだ。

この写真を参考にポーズをつくった。似るまで何回も撮ってもらったので、スタッフも大変だったろう。

これが撮れただけで、一生の記念の価値がある！

おかげ横丁はとても楽しく、一日いても飽きないね。

お伊勢さん参りができて、このプーは幸せだ。

2016. 9. 4 ～ 9. 6

名古屋に立ち寄り、スイートに泊まる。

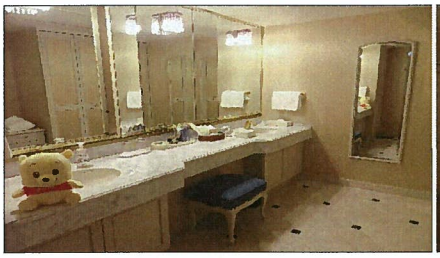
●伊勢まで来てそのまま帰るのはもったいないと、名古屋に寄る計画を立てた。それも 2 泊だ。「身体は持つのか？」。やや気がかりだが、「今日が、いちばん健康で、日に日に元気がなくなる」。これは間違いないから、頑張るのだ。

●名古屋に用があったわけではない。一度、ホテルのスィートに泊まりたくて名古屋東急ホテルで夢を実現させた。しかし広さは86㎡……広いのだが、昨日の志摩観光ホテルは100㎡あった（バルコニー入れての大きさ）。まぁ、予約してしまったのだから優雅に過ごそう。今日がいちばん若いのだから、遊べ！

9月3日は名古屋観光ホテルの普通の部屋に泊まる。
何故プーが逆さま？　プライベート時間だからだ。

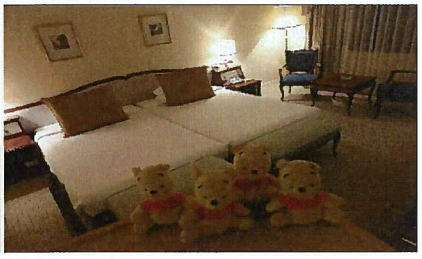
朝ごはんの会場。このホテルは名古屋3本の指に入る老舗の名門だ。朝食も美味しかった。

広いよね！スイートは。一人ではもったいないよネ。ぜいたくの経験！



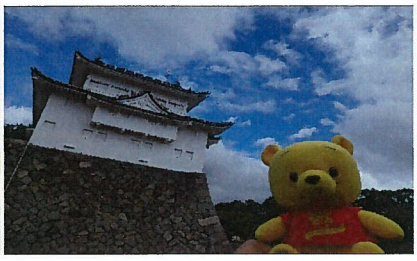
スイートのレストルーム。

スイートのテーブルラウンジ。



スイートのベットルーム。

スイートのルームサービス朝食。



名古屋城とプーさん。

金のしゃちほことプーさん。

楽しかった京都
器コレクション

●そうこうして、私は 2016 年 11 月 7 日から本格的に京都に住んだ。どのくらい居られたか? 2017 年 11 月には一人では危険だとなり、埼玉に一度帰ったが、気持ちを変えて京都に戻り、居続けて 3 年目に入った。

●いちばん楽しかったのは、この器の棚をつくったこと。ヤフオフで落札してはコツコツを増やして、壁一面のコレクションにした。見事な仕上がりだ。

●毎日宅急便で器が届く。それを考えながら並べる。次の日も届くから、レイアウトは日々変わる。そうやってコレクション棚は完成していった。この時間が至福で、みんなが目を見張る堂々たる威容になった。

●このコレクションは、このまま「伯楽家常菜」という大好きな中華料理店に差し上げた。「虎は死してもその皮を遺す」。小林死しても、そのコレクションを、みんなに見ていただける場所に遺した。

楽しかった京都
器、三昧

●飾る器の他に、使う器も買った。「死んだら形見」と、へ理屈を言いながら小料理屋がオープン出きるほど買いまくった。器があれば料理は楽しい。

●友人が来ると、錦市場に買出しに行く。夕飯は外食なので、勝負は朝食。夜の内に器を支度して、朝、盛り付ける。こういう時間が至福であった。

●錦市場で、食べたい物を好きなだけ買う。ホテルに泊まる観光客だとできない。買う快感がある。

●器も小料理屋ほどある。どんな料理でもどんな盛付けでもいける。つくる快感がある。

●買った食材を、明日、どの器をどう盛るかを、前の晩に考え、ザッと並べる。段取りの快感がある。

●そして盛り付ける。「器がステキ!」と言われる「妥協なき私の食卓」。この時間がいちばん幸せだった。

時は過ぎてゆく。

●金子由香里の代表的シャンソンに「時は過ぎてゆく」がある。

●「♪～　眠っている間に　夢見ている間に　時は流れ　過ぎてゆく　子供の頃は　もう夢の中　時は　時は　今も過ぎてゆく」。

●今までは、時間が永遠のようにたっぷりとあったから、過ぎゆく時に気づかなかった。

●しかし余命と言う限定された時間の中にいると、刻々と進む「時の流れ」を、ヒシヒシ感じながら生きることになる。

●そしてこの時間を愛しむように噛み締めている。「昨日できたことが、明日はできない」。だから今、やっておかなければならない。

●こういうギリギリの人生との逢瀬は悪くない。終わりがある方が頑張れるし、終わりはいつも緊張感があり、美しい。

●人生では、いろいろと、そのときどきでしかできない経験をしたい。例えば、死ぬ間際の経験は、死ぬ間際にならないとできない。

●800日前、2016年8月。「この時間は人生最後の充実した忙しさで、これが出来る体力は明日にはない」と私は知っていた。

●そして「余命DEマンボ」にしたいと思って写真も撮ったが、そのまま手をつけずに放置していた。

●元気だった日々を、元気でなくなってから懐かしむ――なんていうのをやってみたかった。時間が経って、遠くからかえりみながらまとめたいと思っていた。そしてそういう日が今来たのだ。

●私は、もうほとんど歩けない。移動は車椅子を押してもらう。動くと息が続かない。だからもう自力ではどこにも行けない。部屋の中の移動もままならない。

●こういう終わりを迎え、スタスタと動けたあの時を思い起こしながら、文章をまとめている。

一番楽しかったこと。

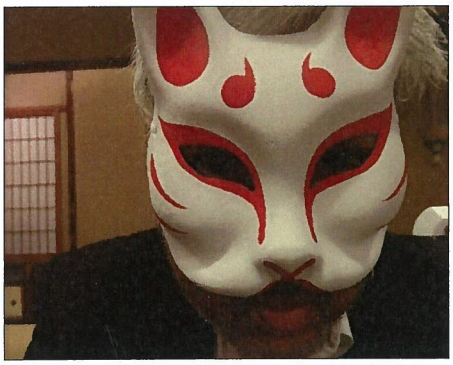
●しかし、車椅子さえ押してもらえば、近間ならまだ何とか行ける。

●まだ見たい所はないのか？　冥途の土産に食べたい物はないか？　浮かんでくる欲望に従い、これからもわずかな日を生きたいと思う。

●800日前、「あの時がいちばん楽しかった」と、今、思うように、今、この身体でも、「いちばん楽しかった」と思える新しいことを見つけたい。

今しておかないと、あと少し、数週間で寝たきりになる。何もできなくなる。

●川越まつりで売っていたこの「猫のお面」を被って過ごすのも楽しかった。酸素ボンベのチューブをお面がすべて隠してくれるのだ。何かに憑依すると気がラクになる。



●最期に時間で、いちばん楽しかったのは、「器のコレクション」と、「好きな器で、食事を出したこと」。この2つ。「余命DEマンボ」を書くうちにそうだったと確信できた。

●前述したが、棚の器コレクションは、胸弾み、心が躍った時間だった。器が届くと、むしり開けては棚のどこに置くかを決める。一日何回も何回も場所を変えて楽しむ。すると、器たちどんどん精彩を放ちカッコ良くなる。室礼者の腕の見せ場だった。本当に楽しかった。

●友人に食事をふるまうのも楽しかった。正確に言うと「料理が好きなのではなく、器と盛付けが好きなのだ」。友人達を招き、好きな器に盛ってご馳走する。こういう京都の時間が至福だったのだ。

まだやりたいこと。

●病気が発見され、この7月で4年。平均余命が2年半から5年だから、最長でもあと1年の命。しかし終わりが近づくと人生は、濃く楽しくなる。

●何故か？　これが最期だと分かるから、思う存分にのびのびと楽しめるのだ。健常者が「旨いすき焼き」を食べても、「これが人生でいちばん旨かった」と言い切れない。まだ先があるからだ。しかし私は「これがいちばん」と言いきれる。感謝も感激もできる。これが先のない人の潔さだ。

●今までの「いちばん！」を思い出すがままに書いてみる。

①「あの世に逝く力」が出せた。②続いて「死ぬなら京都がいちばんいい」が出せた。③「地蔵画集」を作れた。④「雛画集」が作れた。⑤京都に春夏秋冬二年住めた。⑥器三昧の暮らしが出来た。⑦生きている内に自分の弔辞集をまとめられた。⑧飛鳥Ⅱスイートに乗った。⑨花見で皇居の中に入れた。⑩お遍路の地を訪ねた。⑪器コレクションを公共的な場所に寄付した。⑫自分の生前葬を誕生日にかこつけて開いた。⑬「余命DEマンボ」を作れた。まだ尽きないがこの位にしよう。

●さてこれから何をしたいのか？

●短い命の中で何を遺すか？揺れ動く。今、懸命に取り組んでいるのは「死への準備イン京都」の講演会の開催。死は今まで暗くネガティブだった。もっと死は明るくポジティブだと、私が到達した死生観を言い遺す仕事に力を入れている。

●おかげさまで、シスター高木（生と死を考える日本の第一人者）と、終末医療の現場を知る主治医・渡辺先生の全面協力も得て、2019 年 2 月に京都の歴彩館ホールで 400 人の講演会も決まっている。

●それに合わせてそのテキストブックも書きたい。さて、余命の中で出来切るかどうか。最期の勝負の時間を迎えている。　2018.12.30 小林玖仁男